

ウ 唄、三味線ともにメロディーが非常に美しく変化に富んでいる。

エ 歌詞も作曲も上品で、教育的である。

オ 楽器が単なる伴奏の域にとどまらず、唄と対等の器楽的な美しさを持っている。

② 指導の要点

ア 座敷長唄であり、劇場長唄とは異なったものであることを知らせる。

イ 歌詞の大意を理解させると共に、部分ごとに調子が変わることを示し、表現のちがいを感じとらせる。

ウ いろいろな合方あいかたを知り、三味線の奏法やその効果などを感じとらせる。

エ 楽器の部分と歌の部分とのかかわりのおもしろさを感じとらせる。

オ 三味線の組合せによって生ずる効果を感じとらせる。

カ 三味線と唄との「ずれ」に気づかせる。

③ 作曲者について

文政12年(1829年)江戸で長唄、三味線の名人といわれた四代目杵屋六三郎(1739~1855)の作曲で、当時彼と名を競った十代目杵屋六右衛門の「秋の色種」(1845)と共に座敷長唄の名曲とされる。尚、作詞者は不詳である。

④ 曲の構成について

○第1部(本調子) 前奏(前弾)~歌〔日本橋、御殿山(品川)、高輪〕~佃の合方

○第2部(二上り) 歌〔駿河台、浅草、隅田川〕~砧の合方

○第3部(三下り) 歌〔吉原〕~楽の合方~後歌〔上野〕

江戸を中心とした周囲の風景を歌い込んだものだが、まとまった筋があるわけではなく、縁語や掛詞で巧みに名所から名所へとめぐってゆき、季節も移り変わり、かつ時刻までも、日の出から翌朝まで少しずつ進むよう作られている。

⑤ 歌詞及び解説

○第1部(本調子)

~前弾き~(河東節風のゆるやかな歌で)

へ実に豊かなる日の本の、橋のたもとの初霞、
……青簾の小舟、謡ふ小唄の声高輪に、
一佃の合方—

佃の合方は本来、隅田川をあらわすもので

あったが、後には一般に川や舟を表す象徴的な手法(合方)となった。この曲では、「青簾の小舟」とあり、舟をあらわしている。弾き方は三味線の高い方の糸2本を同時に弾くものと、三の糸をはじくか、すくうかして出す柔らかい音とを組み合わせた音型でできている。



○第2部(二上り 唄の聞かせ所)

へ遙か彼方のほととぎす、初音かけたか羽衣の……拍子通はす紙砧

一砧の合方—

砧の合方は、田舎とか秋の寂しさを暗示するもので、特に地唄や箏曲に多く見られ、♪♪という「すくい爪」を用いた音型が特徴である。



○第3部(三下り)

へ忍ぶ文字摺乱るる雁の玉章に
……漣なすもとを籠りせば

一楽の合方—

上野の弁財天・寛永寺の奏楽が聞こえてくるとい意味で楽の合方を用いているわけだが、楽は「雅楽」を意味するが、音楽それ自体は少しも雅楽的でなく、むしろ下座音楽の「楽」や「管弦」「里神楽」の気分にとどまっている。

